Ⅱ　不登校・特別支援教育部会

人との絆を深め、自尊感情を高める支援の在り方を探る

１　はじめに

文部科学省の「令和３年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」によると、小・中学校における長期欠席者(30 日以上欠席した児童生徒)のうち「不登校」を理由とする児童生徒は、全国で 244、940 人(前年度より 48、813 人増)であり、過去最高となっている。

香川県下の不登校の概要を見ると、小・中学校の不登校児童は 1、514 人(前年度より 328 人増)であり、内訳は、小学校 418 人(前年度より 103 人増)、中学校 1、096 人(前年度より 225 人増)となっている。全国・香川とも増加傾向が見られ、不登校対策や支援が重要課題となっている。

２　研究主題について

不登校の要因としては、「無気力・不安」が 49.7%、「友人関係をめぐる問題」9.7%と高い割合を占めている。新型コロナウイルス感染症により友だちと共に活動する機会が減少したり、他の人と関わることが苦手だったりして自己表現ができず、自尊感情が低い児童生徒が多いと考えられる。

そこで、今年度は、人との絆を深め、自尊感情を高める支援の在り方を探るため、２つの研修活動を計画した。不登校児童生徒への支援の在り方を学ぶ研修と児童生徒の「社会性や人間関係調整力の育成」をめざした「クリスマスのつどい」を実践することとした。

３　研究内容

（１）教員の研修

講　話　　「不登校・特別支援児童への理解」
　　講師　臨床心理士・公認心理士　スクールカウンセラー　豊島　佳津子　先生
日　時　　令和４年７月２９日（金）９：００～１１：１０
場　所　　坂出市立川津小学校　多目的室
参加者　　部員７名、市教委より来賓２名
　　若年教員研修部会の部員も参加　オンラインにて各校より多数参加

①　講師自己紹介

はじめに、豊島先生ご自身の経験を語った。その経験が、現在の職業に就くきっかけになった。自分の体験もあるので、相談者の立場になって考えられる。相談者が落ち着くところからスタートするようにしている。

高校時代：悩みごとを高校の先生に聞いてもらう。話したら自分の中で消化できすっきりした。

大学時代：人間関係で苦しみ、休学した。評価されたいのに認められないと非常につらい。

②　心理士として大切にしている考え

根本にあるのは、安全感・安心感である。それがないと解決には向かわない。おおよそ、子どもの問題は安全感・安心感の欠如からである。なぜ安心できていないのか、安全感をもてていないのか、をより深く考える。安心できて、やっと心理的課題（発達の危機）に取り組んでいける。内省が進むと成熟へと進む。

③　不登校児童・生徒への理解

「さいたま子どものこころクリニック　星野崇啓先生」の資料をもとに説明した。『対応に困る行動から、子どもたちの感情（ニーズ）の目安をつける』という資料では、４つの感情の相関関係が

示されている。「不安・怖さ」、「気力の低下（抑うつ)」、「怒り」、「寂しさ」という感情の中から、「不安・怖さ」と「気力の低下（抑うつ)」が複合することで不登校が起こることが多い。なので、不登校を克服するときのスタートは、気力の回復からである。その後、不安の解消に取り組んでいく。

④　発達障害を背景にもつ不登校

・「学校」・「集団」に対する不安を背景にしているのは同じ。

・自分を受け入れてほしい、なかまに入りたいという気持ちは強い場合もあるが、その特性からなかまはずれになったり、いじめ・からかいの対象になったりしがちである。

・おとなしいタイプ・高機能のタイプは、よく分からないまま、周りに合わせて集団適応しようとするが、アイデンティティの乏しさから、またいじめの対象になったり孤立したりしがちである。（どうすればうまくなかまに入れるか、言われてもよく分からないし、できない。）

・ファンタジー（こだわり）の世界に没頭したり、幼児的な万能感にしがみついたりしようとする。

・ネット世界（「広く浅い不特定多数とのコミュニケーション」）に傾倒しやすい。

・頑張れば何でもできると思い込み必死になるが、現実感を伴わない。（例 ユーチューバーになれる。）

・高すぎる目標にしがみついては達成できず、落ち込み、自己評価を下げる悪循環が生じる。なので、自信がない子が多い。

（混乱と自信喪失、身体的な症状が加わり、抑うつ的になると、不登校に移行しやすい。）

⑤　不登校の対応について

・人と場所に対する安心感の回復は同じだが、感覚が独特の場合があるので、その子がどうすれば安心できるのかは個別に見極める。安心できる場所が少しでも多くあればいい。保健室や図書室、相談室など、逃げ込める場所が必要。ただ、どの場所が最適かは個によって違うので、オーダーメイドになる。場所も大切だが、そこにいる人も大切。部屋のルールは持ちながら人と場所に対する安心感の回復をしていく。

・子どもが、自分が期待する人（親や支援者）に相手が気に入らないと思うことを言えるようになる、自己主張し、受け取ってもらう体験が大切。自分を出せること。

・自分は万能でないといけないと思っていることがある。自分は万能ではないが、何もできないわけだはないという発想を何度も経験しながらもっていくことが大切。

⑥　資料「甘えを嫌う大人たち　２０２２Ver.」（豊島佳津子）から

・よくないことを伝えることは感情的になる必要はない。感情的になるということは、大抵、自分の中で解決できていないことが多い。自分は我慢してきた、怒られてきたという背景がある。本当はがまんが苦手、がまんしていることに納得していないことがある。感情にふたをしてしまう癖がある子は、納得していない感情を長い間抱え、その場で納得できていないことを伝えられない現状がある。

・甘えたいというのは、自然に元気を貯めようとするサイン。甘えのタンクを満タンに充電できた子どもたちは、自ら困難にチャレンジしようとする。甘えの裏から感じ取れる一重二重の心のサインを大切に読み取って。

・子どもの自立とは、主体的な選択に基づいて、他者に適度に依存しながら、自身にとってよりよい生活を模索できること。

・養育者だけでなく第三者である先生たちが安心できる場所になること、社会福祉とつないでいくこと。

・お金や物が欲しいという子どもたちには、寄り添いながら。親が都合のいいように行った方法を勘違いしてしまったり、親がお金を管理しすぎてしまったりすることが多い。

⑦　主な質疑応答

Ｑ　不登校の時の電話や家庭訪問時の言葉かけ

Ａ　できる範囲の中で、学校で共有しながら、対応していく。すぐに効果が出るわけではない。本人が落ちつく方法を探れるなら少しずつ。カウンセラーに勧めるなど。進路については、義務教育の終わりがくることをプラスにとって、多様な選択肢があることは変化につながることも多い。落ち着いてくると自分で選んで、充実して過ごせる。

Ｑ　母子分離ができないことが不登校の原因にある場合

Ａ　母子分離は互いに原因がある。母親からのアプローチをしてみては。母親のサポートが強かったり、やりがいが強すぎたりしている可能性がある。母親の安心感がまず大切。カウンセラーにつないでみてはどうか。

Ｑ　不登校児童宅に家庭訪問しても本人に会えない場合

Ａ　子どもの背景が知りたい。情報を集めて、アセスメントをする。それをもとに様々な方向から分析して、目標を立てる。保護者の背景からも探っていく。

Ｑ　かまってほしい子どもへのアプローチ

Ａ　際限ないと気持ちに影響が。満足が７割になるように、こちらの限界の中でどこまで見てあげられるかの線引きを。時間や場所で切り替える。

Ｑ　大人の焦りのコントロール

Ａ　落ち着く本を手元に置いておく。自分の感情を抑えすぎるのはコントロールではないから、めざす方向ではあるが、完璧を求めない。

Ｑ　感情を出しにくい、周りに自己主張できない児童へのアプローチ

Ａ　教師の手腕が発揮できるところ。先生と一緒にできる安心体験を。

Ｑ　不登校生徒との近い立場からの保護者の思いをどう子どもたちに伝えるか。

Ａ　子どもにおうちの人のしんどさを分かってほしいという思いが強いところから、第三者に聞いてもらうことでそのボリュームを下げていく。教師が聞くだけでも、その心の負担は変わっている。

⑧　感想

今回の講話を聞いて、一番心に残ったことは、居場所づくりについてである。我々教員にとっても落ち着ける場所は、職員室や教室など様々であるが、子どもたちも同様である。大人以上に未成熟な子どもにとって、より安心・安全が求められるのだろう。だからこそ、教職員と外部機関が連携しながら、チームとして子どもの居場所づくりに努めていく必要があるのだろうと感じた。また、保護者と二人三脚で取り組むことも不可欠である。保護者の安心・安全が子どもにも影響するはずである。

今回の講話から、不登校の未然防止についても視点をいただいたと感じている。学校が全ての子どもたちにとって、安心・安全な場所となるよう、今回教えていただいたことを実践していきたい。

（２）クリスマスの集い

①　ねらい

周囲の人と楽しく関わり、活動意欲が高まる経験ができる場を設定することで、主体的に活動したり心の安定を図ったりする。

②　活動の概要

ア　日　時　令和４年１２月１日（木）１４：００～１６：００

イ　場　所　坂出市勤労福祉センター

ウ　参加者

中学生３名　小学生３名　保護者３名　引率教員２名

【開会式】

部員８名　　市教委より来賓３名　　計２２名

③　活動状況

開会式の後、「昨年と同じあいさつゲーム」で自己紹介をした。昨年に引き続き参加している児童生徒もいるので、自己紹介のヒントを増やしたが、先に部員が例を示すと、その中から選んで話せていた。

創作活動は会場の後方に座席を作り、リラックスして活動できるよう、小学生と中学生の２つのグループにした。今年もクリスマスツリー作りの材料を用意した。厚めのフエルト生地で作られた本体なので、手ざわりもよく、扱いやすい素材だった。用意した飾りの材料をそのまま本体に付けるだけでなく、それを組み合わせて自分だけの飾りを作ったり、土台にも付けたりする工夫が見られた。

最後のビンゴゲームを楽しみにしている参加者もおり、ビンゴになった時は、自ら手を挙げたり声を出して知らせたりできていた。

【和やかにあいさつゲーム】

【工夫いっぱいのツリー作り】

【面白かったビンゴゲーム】

④　参加した児童生徒の感想

＜グッドカードより＞
・クリスマスの集いで〇〇さんと一緒に過ごすことができて楽しかったです。
・〇〇さんのツリーは、私の思いつかない工夫があってすごいです。
＜振り返りカードより＞
・ツリーを作るのは楽しくて、自分たちで工夫して作った作品は最高でした！
・ビンゴでは楽しくて笑ったり、賞品もいろいろあったりしてすごく面白かった。
・とてもいい思い出になりました。高校生になってもがんばりたいと思いました。

⑤　活動を振り返って

和やかで楽しい雰囲気の中、意欲的に活動している様子が伺えた。感想を見ると、全員が「とても楽しかった」「来年も来たい」というような内容だった。活動を通して充実感や達成感を味わえたのではないかと思う。また、小集団ではあったが、児童生徒の交流がもてたり、自己紹介や感想発表ができたりしたことで、自分自身を出したり認めてもらったりする体験になったと思う。

４　成果と課題

○　夏の講習会では、たくさんの先生方にオンラインにて参加していただき、不登校児童・生徒への対応についての研修を深めることができた。

○　クリスマスの集いでは、この会を楽しみに自主的に参加してくれた子どもたちの笑顔を見ることができた。人とつながることが苦手な子どもたちが、少しでも自分を出し相手とかかわり、自分を素直に表現できる場が設定できた。

△　不登校児童・生徒が急増している中、教職員の悩みを出し合い、学校としての対応の仕方を研修できるようにする。

△　本部会の活動によって、不登校児童・生徒の気持ちが少しでも学校に向くような活動を来年度も考えていく。